

2022 年度日本語教育実習報告

—千駄ヶ谷日本語学校での気づきと成長—

李 兮然・後藤 隆幸

【キーワード】

実習報告、日本語教育、直接法

【要旨】

本稿は、2023年2月に千駄ヶ谷日本語学校で行われた日本語教育実習の実習報告である。今回の実習を通じて、現場ならではの経験を積むことができた。7日にわたっての実習内容を紹介するとともに、実習を通しての感想を述べる。

1. はじめに

本稿は、2023年2月9日から2月17日にかけて、千駄ヶ谷日本語学校で行われた日本語教育実習の実習報告である。本実習は、埼玉大学の学部生7名、大学院生2名の計9名が東京都（校舎によって新宿区や豊島区）にある千駄ヶ谷日本語学校で行ったものである。また、埼玉大学の学生及び大学院生のほか、フェリス女学院大学の学生1名も合同で実習に参加した。

本稿は1日ごとの作業日誌及び実習報告を記載しており、それに加えて今回の実習を通して感じたことも述べていく。本稿の執筆者は実習に参加した大学院生の2名（後藤、李）であり、執筆担当については適所に記載する。

2. 実習報告

2-1 実習の概要

本実習は、2023年2月9日から2月17日にかけて、週末を除いた7日間である。実習は、課題①「～ています」と課題②「～たことがあります」という2つの課題を中心とした内容であり、教案大枠の作成、教案の作成、実践練習、教壇実習という流れで行っていた（図1）。

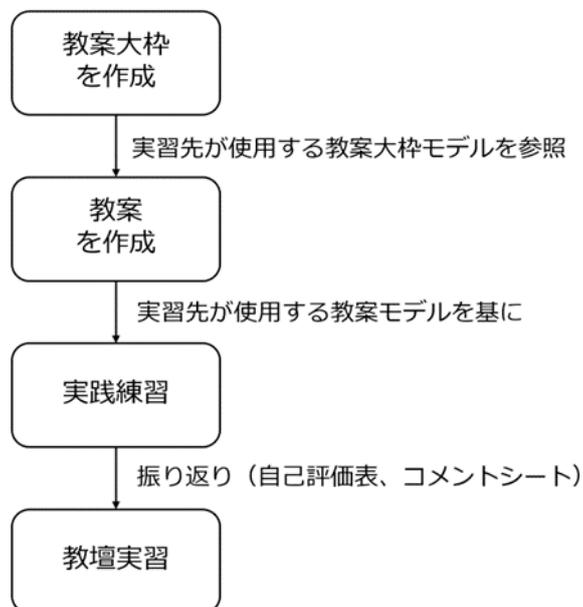


図 1 実習の流れ（作成：李）

教案（大枠）の作成は、実習先から事前に入手した教材、教本などの資料をもとに、実習生自身が教案大枠または教案を作成する作業である。教案（大枠）作成後、実習先から提示した教案（大枠）モデルと実習生自身が作成したものと照合する過程もあった。照合により、教案（大枠）を作成する際に抑えるべきポイントを確認することや、改善点を発見することができた。

また、今回は実習先から提示した教案モデルを基にして実践練習や教壇実習が行われた。学習者と実際に対面して授業を行う教壇実習は、1 回 90 分の授業時間のうちの 60 分を占める。最初の 60 分で授業を行い、残りの 30 分は学習者とフリートークする時間として設けられていた。なお、この教壇実習は学習者と対面する「本番」であるのに対し、実践練習はそれに向けての「演習」と言える。教壇実習では実習生が一人ずつ交代で授業内容の一部を担当するため、実践練習においては教師役及び学習者役の双方を演じた。その中で気づいたことについては実践練習に含まれる振り返りの時間にコメントシートや自己評価表に記入した。

今回の実習は 3 つの学習クラスから 1 つ乃至は 2 つ選ばれて担当した。1 クラスは 6 名の留学生によって構成されていたが、今回はすべて中国や台湾の学習者だった。学習者のほとんどは 2022 年 10 月前後に来日しており、20 代の者が多い。学習者は日本の大学の学部や大学院に進学することを目標としおり、現在は初級日本語を勉強している。また、今回の実習生による授業内容は既習項目の復習として位置付けられており、学習者はそれを知ったうえで、「大学（院）生と話をしたい」と希望して授業に参加していた者であった。つまり、今回の学習者はすでに行われている課程に志願して授業に参加していた。

複数の学習クラスに対応するため、実習生も複数のグループに分かれ、本稿執筆者である後藤および李は同じグループに分かれた。1 課題に対して 4-6 名の実習生がグループとなり、1 人あたり 1 課題に対しておよそ 15-25 分前後の授業内容を担当するという形式であった。

7 日間にわたる実習内容以外にも、実習開始前に事前課題として、オンデマンドで「オリエンテーション」の動画視聴を行った。視聴内容は、実習先である千駄ヶ谷グループや日本語学校の現状についてである。また、課題①「～ています」の教案大枠の作成も事前課題の 1 つであった。そして、7 日目の午後は全体を振り返る時間も設けられた。なお、「振り返り」には、ほかの実習生へのコメントシートや、実習生自身の自己評価表がある。また、教壇実習後においては、学習者が記入したアンケートを確認する振り返りの時間もあった。

2-2 作業日誌

埼玉大学の日本語教育実習では日誌の提出が義務付けられている。本節は、実習 7 日間の作業日誌を取り挙げる。作業日誌は当日の実習が修了した後実習生がそれぞれ記入した上で、翌日に実習先に提出して確認してもらった¹。作業日誌には「自習内容」と「反省・感想」の 2 つの部分があるが、本稿でも記載を還元する観点で 2 つの部分に分けて記載していく。上記表 1 と内容が重なるが、「実習内容」については説明を少し加えながら述べていく。「反省・感想」の記載においては「後藤」「李」と記し、執筆者を明示する。

2-2-1 実習 1 日目 (2 月 9 日)

【実習内容】

初日は動画視聴の形で授業見学をすることから始まった。動画視聴を受けて感じたことについて共有する時間もあった。授業見学を行った後、自己紹介を経て、事前に入手した資料である「教案作成の方法」を、改めて要点を漏らさないように、講師と確認した。その後、事前課題である課題①「～ています」の教案モデル大枠と、実習生自身が作成したものと照合したうえで、修正や調整を入れたり課題①の教案の作成にも取り組んだ。

【反省・感想】

(後藤) 実際の日本語授業を見て、最初に日付の読み方を確認したり、あいさつをす

¹ ただし、7 日目は最終日のため、実習修了直前の記入と確認を行った。

るなどして過去の学習を活かしており、実際に日常生活で使えるための授業をしていることがわかった。齋藤先生は学習者に寄り添って授業を行っているように見えた一方で、先生自身は一人に修正が偏りすぎたという反省点を挙げており、良い授業は良い反省から来ることが分かった。なお、自己紹介でも焦ってしまったが、実際に教える際は焦らないように注意したい。その他、教案作成の際に 40 分以上例文作成に費やしてしまったことは反省したい。

(李) 授業の様子を見たり教案大枠モデルと自分自身が作成したものと照合したりすることで、どのように授業・授業準備をしていくべきかについて考えさせられることが多くあり、勉強になりました。例文づくりや時間過不足対策など、これから実践していくなかで今日得られた経験・知識を活かしていきたいと思います。

2-2-2 実習 2 日目 (2 月 10 日)

【実習内容】

2 日目は、実習生が初日に作成した教案を、実習先が使用している教案モデルと照合した。教案モデルにある部分を一つずつ確認していき、学習者役となって講師の方と一緒に直接法による授業の進行の仕方を勉強した。その後、グループに分かれて課題①の実践練習に取り組んだ。実習生一人ひとりが教師となり、振り当てられた部分について練習した。課題①の教案においては「私は何をしていますか」を学習項目とする「ジェスチャー・ゲーム」を取り入れる内容がある。一般の学習の仕方と異なり、混乱が生じやすそうなゲーム形式の学習の流れについて、実習生同士がアイデアを出し合った。

【反省・感想】

(後藤) モデル教案を拝見して、自分自身が考えていた教案作成は非常に甘い考えであったことを痛感した。「て形」のグループ内の説明についてもゲーム説明に関しても全く足りていなかった。今後、実際に教案を作る際には事細かに、また時間が余った際の活動等もしっかり記しておきたい。最大の反省点は、開始前にコーヒーを飲みすぎて途中でトイレに行かざるを得なくなったことである。健康管理は教案以前の問題であるため、二度とないようにする。また、いざ教壇に立つと頭の中が整理できなくなる可能性が練習でも感じられた。自分でも練習し、次に臨みたい。

(李) 教案モデルを確認していくことで、どのように授業内容を直接法によって伝えていくべきか理解しました。教案モデルに沿って実践練習をしていく際、実際に教壇に立つと出遭うかもしれない問題があることに気づき、どう対応・解決すべきか、実習生

の皆さんと一緒に考えてみることも勉強になりました。教案・教え方をつねに検討することが重要だと思いました。

2-2-3 実習3日目（2月13日）

【実習内容】

3日目は週末を経て、課題①「～ています」の模擬授業から実習が再開した。その後、自己評価表や同グループの他の実習生へのコメントシートを記入したうえで、その場で気づいたことなどについてお互いに共有した。模擬授業とそのフィードバックが終わったあと、実習後半の課題②「～たことがあります」が控えているため、本日の後半は課題②の教案の確認と作成に取り組んだ。

【反省・感想】

（後藤）先生と同じグループの方々を学習者として模擬授業を行なった。普段の発表で原稿に頼った練習をしていたためか、いざ教壇に立つと頭が真っ白となってしまう、思うように口と体がついていけなくなってしまった。先生からのアドバイス通り、おなかの底から声を出すことで少しでもリラックスしたい。まだまだ練習も必要だと思われるため、行っていきたい。教案の2つ目は最初よりも少し作りやすい印象だったが、これが徐々に慣れていく感覚なのかもしれない。

（李）模擬授業とそのフィードバックを通して、自分の教え方の問題点について改めて認識できました。同じ実習生の皆さんの模擬授業を聞いて、良かったことや改善すべきことも意識でき、学びが多かったです。教案（大枠）②の作成のポイントをおさえることで、同じ内容でも、同じ流れでも、学生の属性やニーズによって教案（授業）の内容が変わるということについても改めて感じました。

2-2-4 実習4日目（2月14日）

【実習内容】

4日目は、1日目と2日目と同じ流れで課題②「～たことがあります」の教案モデルを確認したうえで、実践練習に時間をかけた。課題②の練習を終えたあと、5日目に控えている課題①「～ています」の練習を再度行った。授業する際、授業内容をどのように伝えるかということについて、声を明るくしたり、音調の変化を誇張に表現したりすることなど、パラ言語的な手法で雰囲気づくりを行う大切さを講師の方から学んだ。



図 2 実習風景（実践練習）

【反省・感想】

（後藤）抽象的な概念を教える難しさを知ることができた。教案①と教案②の最大の違いは、図示化（視覚化）が教える際に必須かどうかであり、対比がほしい教案②においてはわかりやすい図示を行いたい。直接インパクトを与えられるかが学習者の習得のカギになりそうということが理解できた。模擬授業の方については、まだパラ言語を意識して自分のパートを練習していたわけではないため、本番に備え、修正したい。

（李）課題②のポイントをおさえることを通して、抽象的な文法項目をどのように学生に提示すればいいか勉強しました。実践練習でしっかり明日への準備を整え、教える内容だけでなく、伝わりやすい声の出し方などにも気をつけるべきだと認識できました。

2-2-5 実習 5 日目（2 月 15 日）

【実習内容】

5 日目は教壇実習で、学習者と初めて対面する日である。60 分の授業および 30 分の学習者とのフリートークの後、授業の様子を録画で再確認し、コメントシートなどの記入や感想を共有することを通して振り返りを行った。また振り返りの後には課題②「～たことがあります」の実践練習も行った。

【反省・感想】

（後藤）実際に教壇に立って授業を行うと、なかなか思い通りには進行できないことが体感できた。教壇では無心で授業をしていたため、まず移転は録画を見たときに痛感

した。なぜ説明を入れていなかったのか、なぜこの場面で下を向いてしまったのか、などと感じたが、次回の教壇実習又は実際の授業の前に練習する際、録画して自分の姿を見てみたい。そこで気づいたことを改善することで、実際の授業もより良いものとなるのではないかという仮説が浮上したため、可能であれば検証したい。

(李) 教壇実習ではじめて学生と対面しました。学生の誤りをしっかりフォローできた一方、説明が漏れたり指示が足りなかったりするところについても認識できました。それに向けての改善をはかりたいと思います。学生とのフリートーク時間にたくさんのお話が聞けてよかったです。また、学生が書いたアンケートシートに反映されたことについて、受け止めるべき部分を今度の実践で反映できるよう授業準備をしていきたいと思っています。

2-2-6 実習6日目(2月16日)

【実習内容】

6日目は課題②「～たことがあります」の模擬授業が中心であった。予想外の質問をされたり、語やイントネーションを間違えたりするなど、実際の授業で起こり得る場面を想定した練習が行われ、そのような場面に出遭った場合、どのように冷静を保ちながら対処していくべきかについて事細かに対策を確認し、練習した。

【反省・感想】

(後藤) 学習者に対する反応が模擬授業においてはあまりできなかったため、教壇実習の際には第一にその点を修正するようにしたい。自宅での練習の際には、説明の方法においても再度見直し、混乱を招くことがないように努力する。発音上のミスについては、なかなか良い修正方法が考えられず、様々なジェスチャーを使うに至ったが、教案の段階で視覚化の手段を考えておくのが大切だと思われた。

(李) 課題①の練習時より順調だった気がします。その中で、学習者がもし誤った際の対応の仕方について改めて確認しました。明日の本番は落ち着いて、学習者からうまく話を引き出せるよう頑張りたいと思います。

2-2-7 実習7日目（2月17日）

【実習内容】

最終日は5日目と同様、教壇実習から始まった。教壇実習およびフリートークのあと、課題①「～ています」の際と同じように、録画を見て振り返りを共有した。午後はグループに分かれていた実習生全員が集まり、今回の実習で得られたことについて一人ひとり具体例をあげながら様々な感想を聞いた。その後「日本語教師としての心構え」の資料を読み、日本語教育について改めて考えた。

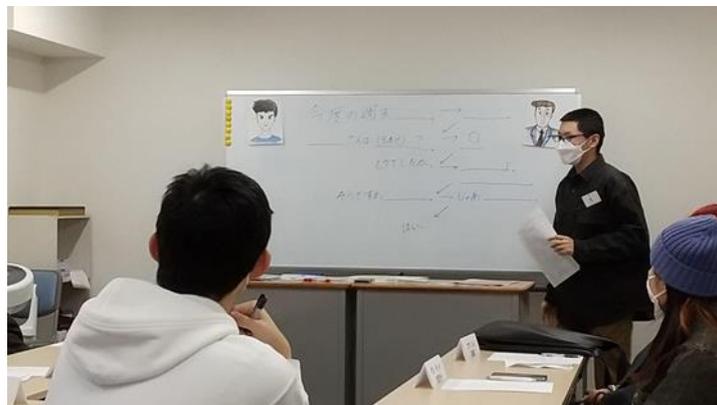


図3 実習風景（教壇実習）

【反省・感想】

（後藤）残り時間を見て、時間がある場合は最後に残すのではなく、リピート回数を増やすなど、臨機応変に対応する大切さを知った。基本的に冷静な場面が終始なかったが、実は場を盛り上げていたというのが面白い点である。全体を通じて最も良かったのは、自分の話し方のクセが客観的に見ることができたため、教案をはじめとした事前準備をしっかりと行う意識ができたことである。実際に日本語を教える際には、今回培われた意識を有意義に扱いたい。

（李）課題①の教壇実習より、学習者の誤りがでたものの、しっかり対応することができ、順調に授業を運ぶことができました。午後の教育実習の振り返りで、授業の教え方の多様性や教師の在り方について改めて認識することができました。とても充実した実習でした。

3. おわりに—千駄ヶ谷日本語学校での実習を通して—

3-1 事前準備と自分自身を知ること（後藤）

筆者はこれまで外国語の学習経験があり、ボランティアで日本語をオンラインで教えていたことに加え、すでに就活面接の際に日本語の模擬授業を行っていたこともあり、日本語授業について大枠のイメージは付けていたつもりであった。しかし、教案を作成したり、教壇に立ったりするとすぐに難しさを感じるようになった。実習を通じて、事前準備を細かく行うことの重要性と自分自身の現状を知り、改善していくサイクルを回していく必要性を実感したため、その詳細をここで述べたい。

事前課題として教案の大枠を作成したが、さらにその詳細を作る際にもあまり細かく教案を作ることができなかった。その理由は、できる「だろう」という甘い予測であったため、実際にモデル教案の細かさを見た際に衝撃を受けた。慣れないうちは教案を事細かにつくる大切さをここで知ったが、予測の甘さは模擬授業の練習の際にも露呈した。練習を行っていても、教壇に立つとあまりの緊張により、学習者のことにまで気が回らず、自分自身を律することだけで相当な労力を使った。練習の後に、先生から練習の際には人がいると思って話す練習を行うとよいというアドバイスを頂いた。まだまだ上達するという意識を持って、本番を常に想定して事前準備を細かく行うことができれば、学習者の様子を見ながら授業を進めるということが可能になると考えられる。向上心を常に持ちつつ、現在の状態を知ることの大切さを学ぶことができた。

ある程度意識できた教案②の教壇実習については、学習者の様子を見ながら授業を行うことができたため、こうしたことは今後も続けていきたい。過去に行った実習や授業を通じて、自分を知り、アップデートしていくことが大切だと気づかされた今回の実習であった。

3-2 学習者の話を聞く姿勢の大切さ（李）

筆者は中国人留学生で、来日から大学に入学するまでは、日本語学校での生活を1年半送ってきた。そのため、実習環境である日本語学校に親近感を持ったのと同時に、学習者はどのような気持ちで授業に臨んでいるか、教師はどのような授業をすればいいのかを考えながら、今回の実習に取り組んでいた。実習を通して感じられたことがたくさんあるなかで、学習者である外国人留学生の話をきちんと聞くという日本語教師としての姿勢をとることの必要性について、ここで述べておきたい。

筆者は日本語学校に通っている1年半の期間中には、学校とアルバイト先以外にほとんどネイティブの日本人の方と接する機会がなかった。学校では勉強、アルバイト先では接客で、使用される日本語も限られ、「日常会話」と言えるものは、休憩時間のわずかしかなかった。筆者の周りではアルバイトをしておらず、学校以外には日本語を使用することがほとんどなく、そのためか日本語能力がなかなか上がらないというケースも少なくない。なぜポジティブに話さないかという点、筆者の経験に基づいていけば、会話しようとする相手とされなかったり話をせかされたりして挫折してしまい、自信を

なくしたことに原因があるケースが多いのではと考えている。

そのような学習者にとって、学校で出会える日本語教師は貴重な話し相手である。そのため、日本語や日本文化についての知識を教えるという教師の姿勢だけではなく、話し相手として学習者一人ひとりの話をきちんと聞く姿勢をとることもとても大事だと思われる。ことばがうまく言えない場合はじっくり待ってあげたり、テキスト以外の「生きた」日本語を口にしたら肯定してあげたりするなど、学習者の人生の悩みを解決することはないであろうが、「私、日本語を話せているな」という自信を学習者がそのなかから得られ、語学力、そして人として成長していく力を身につけることに繋がると考えている。筆者も今後、教師の立場に立つことがあれば、今回の実習を通して得られた以上のことを心がけていきたい。

謝辞

今回の実習を行うにあたり、実習先で一人一人に目を配り、適切にご指導くださった小山紀子先生、嘉住麻衣先生及び実習に来ていただいた先生方に深く感謝申し上げます。また、短い期間ながら共に学び、実習を行った埼玉大学及びフェリス女学院大学の学生の方々にも大変お世話になりました。この場を借りて感謝申し上げます。

李兮然（埼玉大学大学院人文社会科学研究科博士後期課程）
後藤隆幸（埼玉大学大学院人文社会科学研究科博士前期課程）